

原田助著

訂正
九版

信仰要領

高岡市坂下町

日本基督教會

警醒社書店

緒言

此小冊子は基督教信仰の要領を簡單平易を旨として記述したるものなり、是に依つて基督教義の大體を會得し漸く信仰の蘊奥に進む人の多からむことを祈る。

書中記する所は自己の意見を主とせず専ら聖書の教訓に基けり、故に讀者は括弧中に引照したる聖書の語句を參考せられむことを望む。

明治三十七年十一月

著者誌す

信 仰 要 領

訂正 九版 信 仰 要 領

一、神とは何なるや

神は宇宙の本源にして萬物の活ける造主、萬民の天父なる方である

(使徒行傳十七〇
二四及び二八)

二、神を見ることを得るや

神は靈なれば吾等の肉眼を以て見ることは出來ぬ(約翰傳四〇二四)

三、見えざる神の存在を如何にして知るか

此天地萬物に現はれたる智慧と能力に依て宇宙の大本は智慧あり能力あることを知り、又天地の法則の一定不變で秩序の毫も亂れざる

を見て之を統一する所の者は唯だ獨りでなくてはならぬことを知る

(羅馬書一〇二十)
(以弗所四〇六)

四、其外に尙ほ神を信すべき理由あるか

人間は生れながら宗教の動物にして何ものをか禮拜せねば其心情を満足することが出来ぬ、是は古今東西を通じて凡ての人類の經驗であつて吾等が神を信すべき一の理由である(詩篇四二)

五、神の性質は如何なるものであるか

神の性質の重なるものは全智全能なること(使徒一五〇一八、馬太一九〇二六) 在さざる所なきこと(使徒一七) 不變なること(雅各一) 聖きこと(彼前一〇一) 及び愛

(約翰第壹書) である
(四〇一六)

六、神を天父といふは如何なる譯なるか

神かみと人ひととは親子おやこの如ごとき關係くわんけいがあることは基督教きりすとけうに依よつて始はじめて明あきらかになつた眞理しんりである、元來人間ぐわんらいじんけんは神かみの智ちと能ちからと義たじきとを享うけて世よに生うれたるもの即すなはち神かみの子こである、苟いやしくも人間じんけんといふ以上いじやうは時代じたいと場所ばしょとを問とはず神かみより出いでぬものはない、又神かみの愛願あいこを蒙かうむらぬものはない、神かみを天父てんぷと云いふは如斯理由かくのよとかりいうによるのである(馬太五〇四
五ヨリ四八)

七、基督は如何なる人なるか

今いまより凡およそ一千九百餘年前よねんせんち地中海ちゆうかいの東岸とうがんなるユダヤ國こくに生うれたる方かたで、其父そのちちと云いはれしは工匠たいくであつて母はははマリヤとて世よにも稀まれなる賢婦人けんおじんであつた、三十歳さいじの頃ころから蹶然起けつぜんたつて世よに出いで福音ふくいんを説とき天父てんぷ

の慈愛を述べ正義人道を傳へ給ふた、然るに當事の有司、宗教家等
 基督を厭ふて遂に十字架に礎けて殺したのである、時に基督は三十
 二三歳の頃であつた、爾來茲に一千九百年、世は聖人豪傑の生出せ
 しこと數限りなけれども、世の人に崇敬せらるゝこと基督の如きも
 のはない實に空前絶後である、始め其教は非常に迫害を蒙りしも漸
 次各國の蔓延し、今では基督教會の無い國はない程になつた
 八、耶蘇と基督の意味を如りたし

イエスとは原語「救ふ」と云ふ字より來る、即ち實名である（馬太一〇）
 キリストとは希臘語にて「膏にて聖められた」といふことで膏油は昔
 時即位式などに用ゐたもの即ち神より特に聖職を授かつたものとい

ふ義である、メシヤは希伯來語にてキリストのことである

九、基督の福音とは何であるか

福音とは喜ばしき音信といふ意味で基督の教を指したものである

(路加傳)基督の教は貧富貴賤を論せず老幼智愚を問はず何人にも慰安と喜悅と勇氣を與ふる天來の能力である(馬太五〇三ヨリ十) (二羅馬一〇一六)

十、基督教の最も大切なる誠は何であるか

愛である、基督は或人の間に對へて左の如く申された「爾心を盡し精神を盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべしこれ第一にして大なる誠なり、第二も亦これに同じ己の如く爾の隣を愛すべし、凡の律法と預言者は此二の誠に因り」(馬太二十二〇) (三七ヨリ四十)

十一、神の國とは何なるか

神の國とは天國とも云ひ神の聖旨の行はるゝ所、正義仁愛の支配する所で即ち理想の世界である、或時は基督教を神の國と稱へてある、それは神の國が基督教の教訓の中心となつて居るからである

十二、基督を神の子と云ふは何故なるや

凡ての人は神の子たるべきものなれども其學際を見るに圓滿完全なる性情を有て誠に神の子と云ふべき資格を備へたるものはない、只基督は清淨無垢神の心を心とし一點の私心なき方であつた、故に基督をば「神の生み給へる獨子」といふのである、即ち基督は一般の人類よりも超越したる人格を有した方である（約翰傳一）

十三、三位一體とは如何なる事なるや

天父てんおと基督キリストと聖靈せいれいの關係くわんけいを述べたる教理けうりであるが神學上しんがくじやうの一大難問たいなんもん題たいである、古來こらい未だ満足まんぞくなる説明せつめいを與あたへた者ものはない、今詳いましき學說がくせつは略りやくして只實際ただじつさいの點てんを云いへば、神かみは獨一ひとりであるが其顯現そのあらはれに至りては一議いちぎでない、萬民ばんみんの父ちちたる點てんより云いば即すなはち天父てんおである、又また基督キリストの人格じんかくに現あらはれたる神かみの御心みこころは人類じんるゐを罪つみより救すくはんとすくひぬしの救主すくひぬしたる點てんである、又また聖靈せいれいは常つねに人心じんしんに住すみて正義せいぎに光明くわうみやうに導みちびかんとし給たまへる神かみは指さしたのである、以上父いじやうちと子こ(基督キリスト)と聖靈せいれいを總稱さうしやうしにツリニチ一(三的)の意といふ、之これを三位一體さんみいつたいと譯やくしたのである

十四、罪つみとは何なになるか

罪つみの根本こんぽんは天父てんぷなる神かみより離はなれて只己ただおのこが心こゝろの儘ままをなすことである、凡すべて神かみの聖旨みむねに背そむきたる思想おもひと行爲おこなひのみならず爲なすべき義務ぎむを怠おこたるとも亦罪またつみである(雅各四〇一七)

十五、救すくひとは何なになるか

神かみの恩恵めぐみを心こゝろに感かんじて之これに歸順きじゆんし罪惡ざいあくを悔改くひあらためて只管ひたすらてんぷ天父てんぷの大御心おほみこゝろに從順じゆんじゆんなる者ものとなることである

十六、基督きりすとの贖罪あがなひと云いふことありや

基督きりすとの十字架じよじかは犠牲ぎせいの頂點ちやうてんで愛あいの極致きよくちと云いはなければならぬ、吾等われらが基督きりすとの慈愛じあいに感激かんげきし罪つみの惡にくむべきを悟さとり翻然はんぜんとして天父てんぷを信しんずるに至いたつたのは即ち之すなはちこれが爲ためである、然されば吾等われらは基督きりすとの十字架じよじかに依よ

信 仰 要 領

て神かみに歸順きじゆんすることゝなつたので基督きりすとに贖あがなはれたのである、贖罪あがなひとは人ひとを神かみと和わせしむるとで神人しんじん合一がいつとは此事このことである(以弗所二〇十六)

十七、聖靈せいれいの感化かんくわとは何なるか

人心じんしんに活動くわつどうせる神かみの靈能れいのちからである、凡おほそ義ぎを慕したひ善せんを求もとめ神かみを敬うやまつひ人を愛あいするが如ごとき純潔じゆんけつなる性情せいじやうは即すなはち吾等われらの衷うちなる神靈しんれいの働はたらきと云いつてもよい、特とくに人ひとが舊來きうらいの罪惡ざいあくを悔改くひあらためて神かみの國くにに入いるてふ心中しんちゆうの大變たい化けを實驗じつけんすることは最もつとも著いちどしい聖靈せいれいの感化かんくわと云いはなければならぬ

(加拉太五〇三、二二三)

十八、永生かぎりなきいのちとは何なになるか

無上むじやうの幸福かうふく圓滿まんまんの生涯しやうがいを云いふのである、即すなはち神かみの慈愛じあいに感かんじキリス

トの福音ふくいんを信じしん安んあん心しん立命りつめいの境涯きやうがいに至いたれば永なが生せいを得たのである、
此生命このいのちは假令たとへ肉躰にくたい死しぬるとも亡はろびるものではない即ち神すなはと共ともに永えい

世無究せいむきうのものである(約翰十 七〇三)

十九、賞罰しょうばつと云ふことありや

善因ぜんいんあれば善果ぜんくわある天地間てんちかんの法律はふそくは寸毫すんかうの微びも違たがはぬものである、
されば道義たうぎ上じやうにも義ぎき賞罰しょうばつの必かならず行おこなはるゝものなることは疑うたがふこ
とが出来ぬ現世げんせいに於おても日々ひぢぢ行おこなはれて居をる、併しかし其終結そのしゆうけつは萬世ばんせいの後の
ち世よの終末おはりに至いたらねば決けつしない聖書せいしよに末世まのおはりの賞罰しょうばつとあるは此事このことであ

らう(馬太七〇十七羅馬 書二〇六ヨリ十一)

二十、聖書せいしよに新約しんやくと舊約きうやくとあるは如何いかになる譯わけか

舊約は基督世に出で給ふ以前の作で新約は基督の言行を始め其弟子等の書翰等を集めたものである、舊約は準備で新約は成就である、約とは神の約束と云ふので此聖書は神の人間に對する約束を記したと云ふ考から名けたものである

廿一、舊約聖書は如何にして出來たるや

舊約は基督紀元前の著作三十九卷の編輯したものであるが年代は千體年間に涉つて記者も多人數である、猶太國の古事記、歴史、法律、詩歌、戯曲及び預言者と云へる人々の演說等を集めたもので文學上から申しても稀有の傑作が少くない、併しながら宗教上より云へば基督の教訓に比しては勿論幼稚なる點が多いのである

廿二、新約聖書の重なるものは何々なるや

新約全書二十七卷の内始めの四冊は福音書と云うて基督一代の言行を記したもので著者は皆違つて居る、基督の弟子又は弟子の指圖は依つて録したものと一般に信ぜられて居る、使徒行傳と云ふのは門弟等の傳道旅行記で羅馬書以上はパウロ、ヤコブ、ペテロ、ヨハネ等の書翰で、最後の黙示録といふのは譬喩の借て當時の時勢を諷し基督教が遂に全勝を得べきことを述べたもので最も分り悪き書である

廿三、聖書と他教の經典とは如何なる差引あるか

聖書とても一點一角の誤謬がないとは云はれぬ、又た他教の經典は

領 要 仰 信

一切取るに足らぬと云ふべきものではないが、天地の主宰たる天父の存在を明白にし人間と神の關係を知らしめ殊に空前絶後の人格キリストの言行を傳へ又た其門弟等の宗教的實驗を學んで安心立命を得べき救の大道を示したるものは天下此聖書より外にはない、此聖書が宗教上の最大寶典たることは凡ての書籍中最も廣く世人に愛讀せられて千餘年間ますます盛んなる一事に徴しても明白である（提摩書三〇十六、七）
約翰二〇三二）

廿四、聖書中の奇跡は信すべきものなりや

基督が奇跡を行ふ能力を有し給ふたのみならず基督の人物は一大奇跡である是何人も疑はないことであるが舊新約聖書中にある奇跡に

關する凡ての記事が歴史上正確であるや否やは別問題であつて今日説明の出来ぬことが多い、併しながら奇跡の事は之を信せねば救を得ることが出来ぬほど重大な事ではない

廿五、基督教會に儀式ありや

天主教、希臘教（正教）の如きは随分儀式が多いことである、新教中
でも監督教會などには色々の儀式がある、併し多數の新教の教會で
は信徒の必ず守るべきものとしては洗禮と晚餐禮と云ふ二箇の儀式が
あるだけである

廿六、洗禮は何は表號なるか

舊き罪惡の生涯を去て新き聖生涯に入れるを表するものである、火

信 仰 要 領

を以て罪を潔めるのではない靈は依て心の清められたことを表すのである(使徒行八〇三六、七)
(彼得前三〇二一)

廿七、晩餐禮は何なるや

基督が最後に弟子等と飲食を共にせられたことを記念するので其聖語の如くパンは其肉を表し葡萄酒は其血を表するものでキリストが吾等の爲めに十字架に就き犠牲となり給ふたことを憶ひ出し其精神を服膺せんが爲めである(哥林多前書十一〇二三ヨリ二五)

廿八、日曜日の起源は如何

猶太國にては古來一週間の終の日(今の土曜日)を安息日とし國民擧つて此日に凡ての勞働を休んだのであるが基督が日曜日に復活し給

ふて以來信者は紀念の爲め此日に宗教上の集會を開く事となり遂に今日の如く専ら此日の會堂に集り又は傳道慈善の働をなすことゝなつたのである

廿九、舊教と新教の由來は如何

基督教會が歐洲に蔓延することゝなつてから西方は羅馬に東方はコンスタンチノーブルに中心が出来て紀元四百年頃には東西に相對立するようになった、天主教は即ち西方教會が正教會(希臘教)は東方教會である、此東方教會は幾變遷の後今は露國が中心で同皇帝が其總裁となられて居る、羅馬を中心としたる天主教會は腐敗を極めて弊害百出の餘遂に今より四百年程前大革命の端を發しルーテル其

他の唱導に依て法皇に抗し基督時代の純正なる宗教を復興すること
なつた是れが新教である、今日新教を盛んに行はるゝは英、米、
獨、荷蘭、瑞典、那諾等の諸國である

三十、新教中にも種々の宗派あるは如何

教會政治の相異に依て監督、長老、組合等の別ちがある、監督教會
は大監督以下役員があつて教會の政治を執るので（聖公會、美以教
會等此類）、長老教會は教會に長老といふ役を選擧して小會、中
會、大會などを組織し全鉢の政治を之に托するのである（日本基督
教會などは此類）、組合教會は會員が主權者で各教會は皆な自治な
最も自由なる政治の住方である、同じ組合政治なれども洗禮の方法

が違ふて浸禮しんれい（全身ぜんしんを水中すいちゆうに浸して洗禮せんれいをなす禮らい）を用ゐるのを浸禮しんれい教會けうくわいと云ふ、其他そなた多くおほの分派ぶんぱがあつて翌憶しふくわん、儀式ぎしき、學說がくせつなど各々おの／＼多少せうの異ちがひがある、併ししか獨一どくいつの神かみを信じしんじ基督きりすとを救主きうしゆと仰ぎあふ聖書せいしよを信仰しんかうの標準へうじゆんとなす等とうの肝要點かんえうてんに於ては皆同一みなどういつである

卅一、教會けうくわいに入るいるは何なんの必要ひつたせうあるや

天父てんふを信じしんじ基督きりすとの教をしへを守るもるの決心けつしんなした以上いじやうは同信仰どうしんかうを抱いたく者とものと共に協力けふりよくして教をしへの爲ために盡つくさんと思おもふは人情にんじやうの自然しぜんである、又また互たがひに相獎勵あひしやうらいし自分じぶんの信仰しんかうを進すすめて行くゆく點てんに於おても孤獨こどくでは出來できない信仰しんの友ともを得うることが必要ひつたせうである

卅二、教會員けうくわいゐんたる者ものの義務ぎむは何なになるや

信 仰 要 領

第一、教會定期の集會に出席すること、第二、各自の分に應じて教會の維持を分擔し且つ傳道の爲めに献金の義務を負ふこと、固より其額の多少を論じないが身も寶も皆な神より賜ふたものであるからこれを神の爲めに最も良く用ゐるのが當然である、
第三、自らの境遇身分に應じて道を傳ふべきこと、第四、日々の言行を以て天父の榮光を顯はし社會の模範たらんとこの精神を有すること（馬太五〇十六、哥林多前十〇三一）

卅三、信仰の修養に必要な心得は何なるや

第一、神に就きキリストに就きての智識と靈性の糧を得る爲め毎日怠らず聖書を讀むこと、第二、祈禱に依て神と交はり罪を懺悔し恩恵を感謝し衷心の祈りを捧ぐること、第三、教會の爲めに何事をか

なして働はたらき他人たにんの信しん仰かうに導みちかんことを務つとむること、要えうするに基き督との
心こころと信しんずる所ところを己おのが心こころとなし基き督とに働はたらひ言げん行かうをなす心こころ掛かけがあれば基き
督と信しん徒とたる資し格かくはちのづから完くわん備びするであらう(腓立比
二〇五)

明治三十七年一月七日印
明治三十七年一月十日發
明治四十三年一月廿日八
大正二年五月五日九

刷行版版

定價二錢五厘

著者兼發行者

京都市上京區龍前町六百二番地

原 田 助

印刷者

東京市京橋區日吉町十番地

渡 邊 爲 藏



印刷所
民友社

東京市京橋區日吉町十番地

原 田 助先生著

信仰と理想

定 價 五 十 錢
郵 税 六 錢

清高の理想、健全の信仰をあまねく鼓吹する
目的でかゝれた隨筆である。隨筆は讀むに肩
が凝らず、しかも興味がある。

原田先生は基督教界の能文家、文章として誦
すべきものである。

古心書
百母